

巻頭言

名古屋大学医学部保健学科

石田 和人

観察することと想像すること

私は自動車通勤をやめ、公共交通機関を利用し自転車と徒歩での通勤を始めた。言うまでもなく、車は便利だし早く目的地につくことができる。一旦は決心したものの、すぐに断念して車通勤に戻ってしまうのではないかなどという多少の心配もあった。しかし、気がつくと、この通勤スタイルから抜けられなくなっている自分に気付く。建設中の住宅、幼稚園バスを待つ親子、近くに住んでいるのにめったに合わない知人など色んな場面に遭遇でき、その変化にも気づく。少し余裕があれば挨拶の一つもかわすことができる。そんな何でもないようなことが、妙に新鮮で楽しいのである。

テレビやインターネットも現代生活の必須アイテムである。パソコンをあまり使わない人でも、地下鉄ホームの電光掲示板やズボンのポケットにある携帯電話には、秒単位で新しいニュースが飛び込んでくる。ほとんどの人が「忙しい、忙しい！」と、バタバタ慌てながら生活を送っている。こうした情報量過多の影響は子供社会にも直撃している。表向きはゆとり教育といいながら、結果的には塾通いをする子供が増えた。中学受験のために6年生の3学期には学校にも来なくなる子供もいると聞いて私は愕然とした。

さて、理学療法の分野ではどうだろう？私が新人の理学療法士であったころは、患者さんを担当するにもどうしてよいのか分からず、わらをも掴む思いで医学書店に足を運ぶこともあったが、それでも十分な情報は得られなかった。更に先輩の理学療法士は、英語の本で学んだとも聞いている。それに比べて今は違う。実に数多くの書籍が次から次へと出版され、インターネットを検索すれば、かなりの情報が瞬く間に得られる。それにマニュアル本と言えるような書籍が増えた。出版する側からすれば、売れる本こそ価値のある書籍であると認識されるであろうし、そういった本が増えるのもある程度は致し方ない。ここで一番大切なことは、読み手(理学療法士)が、その内容を「鵜呑み」にしないことだと思う。何の吟味もしないで、一切疑うこともせず、本に書かれたとおりに理学療法を遂行した場合、たとえ、その症例に対してはうまくいったとしても、次に遭遇する症例が少し違えばもうお手上げである。理学療法が対象とする相手は、人であり、必ずバリエーションが存在する。また、理学療法士自身も人であり治療者としての特質にもバリエーションが存在する。ここに非常なる難しさがあるからこそ、理学療法士は頭をかかえて悩むことになるし、またそれでこそ臨床の面白さを実感することができるのだと思う。逆に、本で読んだからとか、先輩に聞いたから、ということで「鵜呑み」にするのは、極めて危険であり、大げさかもしれないが、理学療法学の発展を阻む大きな因子にもなりかねない。

私が学生の時(もう、20数年前のことになるが)、指導してくださっていた先輩理学療法士にこう質問した。「新人の理学療法士と何年も臨床を経験しているベテラン理学療法士と何が違うのですか？」と。その方は、若干答えにくそうにはあったが、ご自分のことばで、「ベテランの理学療法士は、豊富な経験や知識から、それを総動員して、実に色々な観点から患者さんを診て治療にあたっている」と答えて下さった。その時の私には十分理解できない回答であったが、今になってみると、なかなか深みのある理学療法士らしい心ある回答だと思う。果たして今の自分はそんな理学療法士になれているのだろうか？理学療法は art and science であり、決して art or science ではなく、両者がしっかり結びついてこそ理学療法といえよう。それを実践する鍵は、「よく観察すること」だと思う。そして、自分の目で見て、自分の手で触れた事実を無視しない誠実さこそが大切であり、患者さんが訴える苦しみこそ、本来鵜呑みすべき対象ではないだろうか。その時必要となるもうひとつの鍵は、「想像力」だと思う。過剰な情報に埋もれ、スピードばかりを気にして過ごすのではなく、観察することと想像することという理学療法の原点に立ち返り、じっくりと患者さんに立ち向かうことこそ、これからの理学療法士に必須の資質だと考えている。